

# ソウルメイトの神秘

天野  
美里

青山ライフ出版

## プロローグ

人間って一体なんなのだろう。人生ってなんなのだろう。輪廻転生することの深い意味を、私自身の体験を通して追求してみました。

誰もが何がしかのカルマを持って、この世に誕生している。自分が現世で何を改めるべきか、或いは何を成すべきか。人それぞれ、宿命の様なものを持って生まれてきている。

そのことに早く気付いて欲しい。現世で成すべき任務とは何なのかを、早く見つけて、どんな困難が立ち塞がっても、怯むことなく前向きに信念を持って生きていかねばならない。

折角いただいた、この命を無駄にしない様に、魂が高上する為の試練だと思い、力強く生きていくこと、決して諦めないこと、命というものを軽んじないこと。

その姿勢が一番大事だということを、私の今までの人生を振り返って感じています。

それを物語的にアレンジして書いてみました。

この想いが読んでくださる方々に伝わります様に願っています。

## ソウルメイトの神秘∞目次

プロローグ..... 2

∞

友人の妊娠..... 6

結婚..... 11

ソウルメイト..... 15

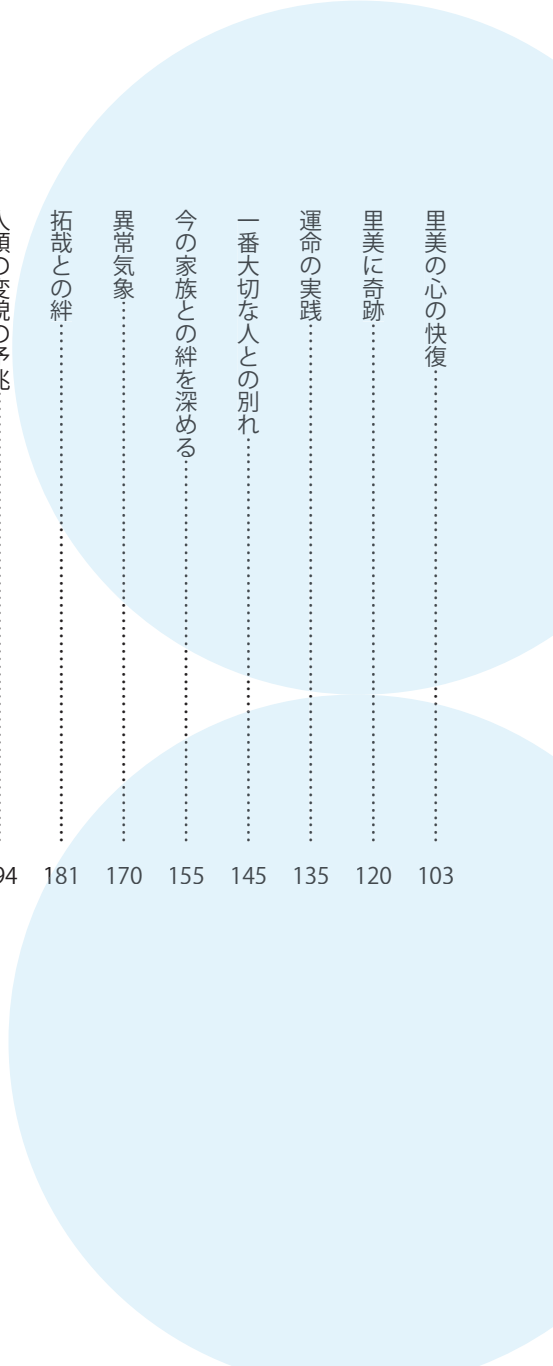
一番大事なソウルメイトとの再会..... 31

ある宗教との出会い..... 39

テルとの語り..... 43

愛情を友情に変える..... 79

我が子に教えられた..... 97



エピソード……………	206
異常気象は続く……………	201
人類の変貌の予兆……………	194
拓哉との絆……………	181
異常気象……………	170
今の家族との絆を深める……………	155
一番大切な人との別れ……………	145
運命の実践……………	135
里美に奇跡……………	120
里美の心の快復……………	103

ソウルメイトの神秘

## 友人の妊娠

私は植木里美、二十歳、短大を卒業して、仕事を捜していた。私の夢はなるべく自然を残した様な公園のデザインをすることである。しかし、なかなかそんな仕事は見つからない。

私は何故か、近い将来、働けなくなるのではないかと、漠然とそう思っていた。自給の高いアルバイトをして、今の内にお金を貯めておかないと、と思い求人雑誌を見ていたら、時給千五百円という仲居さん募集の仕事に目がとまった。

「よし、これにしよう」と意を決した。

私は元々、金銭欲、物質欲があまり無い方だから買い物というものをあまりしない。だから、この何年間で結構、貯金が出来た。

ある夏、仲居を派遣する会社から、伊豆のリゾート地に夏の間だけの二ヶ月間の派遣を命ぜられて、伊豆で楽しく働いていた。伊豆は空気が良く、景色も抜群で、もっと長く働きたいなと思っていた。

八月も終わりに近い頃、非常にリアルで不思議な夢を見た。

雲一つ無い真つ青な空に、肉の塊がポツカリと浮かんでいる。しばらくの間それを見ていると、真ん中からパカンと割れて、仏像の様な肌質の顔が現れ、それがだんだん人の肌質に変わっていつて、とてもステキな男性の顔になっていき、下を見下ろしている。

その品格のある顔立ちは正に高貴な、お方だと思える程の人だった。

私は下から、それを見上げている。そうしたら、その顔はニッコリと、とてもいい笑顔で微笑んで、「もう大丈夫ですよ、どいうメッセージが私に送られてきた。

その人が口を動かして声を出したわけではないが、私には伝わってくる。

そして目が覚めた。私は何故か落ち着かなかった。

数日後また妙な夢をみた。

その場所は山間地区の様な景色が出てきて、私は奥の方へ向かって歩いていて。それは、それは、綺麗な花園を歩いていた。季節は春で温かく心地が良い。

しばらく歩いていると、チラツチラツと白いものが降ってきた。雪だ。ふと奥の方に目を向けると、だんだん雪が多くなり、奥の方は真つ白で見えなくなる程、降っている。

まるで、冬と春が同時にきた様な不思議な光景だった。

私はこんな不思議な夢をみて、これは私へのメッセージだ。いやに胸騒ぎがして落ち着かない。どこかに行かなくちゃならない。急いで行かなくちゃならないと何故かそう思える。何気なく友人の久美子に電話をした。

すると久美子は「今、妊娠していて、つわりがひどいのよ」と言う。

私は、アッこれだと思い、仕事を辞めてすぐ出発した。

私は自分が住んでいる東京には帰らないで、まず、久美子のアパートに向かった。

チャイムを鳴らしたら久美子が出て来た。

何だか顔色が悪く、少し痩せた様に見える。つわりがひどいので、体力も落ちているようなので、これは大変だと思い、掃除の手伝いをしていたら、久美子がトイレから出てきて、

「ちよっと、出血した」と言う。

「えー、それはおかしい、流産の危険性がある。すぐ、病院に行こう」と言い、タクシーを呼んだ。久美子を通っている産婦人科は歩いて二十分くらいの所なので、まもなく、到着した。

すると、やはり、流産しかかっていますから、すぐ入院ということになった。

私は久美子から、玄関の鍵を借りて、入院に必要な物を取りに帰った。

そして、アパートで、御主人に知らせた。

久美子が入院してしまったので、久美子の家の家事を私がしなくちゃと思い、久美子のアパートの近くに引っ越してきた。

ああ、近い将来、働けなくなると漠然と思ったのは、こういうことだったのかと思った。

しばらくして、久美子は流産の危機を脱して退院してきた。その後も手伝いを続けて、いよいよ、臨月を迎えて、久美子は元気な女の子を産んだ。名前は『蘭』と命名したそうだ。産後の世話もして、久美子はもう普通の生活をもよくなった。

「ねえ、里美、私、今でも不思議なんだけど、私が流産いかかる前にどうして、電話をしなきゃ



たの？」

「何だかすごいリアルで不思議な夢を二回みてね。」

初めのは、真つ青な空に肉の塊がポツカリと浮かんでいたの。私は下からそれをじっと見ているのね。すると、その肉の塊が真ん中からパカンと割れて、何だか仏像の様な肌質の顔が表れて、それがだんだん人の肌質に変わっていった、とつてもステキな優しそうな笑顔になって、「もう大丈夫ですよ」というメッセージが伝わってきたの。

その人が口を動かして、喋るわけではなくて、声が聴こえるわけでもないんだけど、夢の中では、自然にメッセージが伝わってくるのよ。

その次にみた夢は、季節は春で、ポカポカ温かい日に綺麗な花園を歩いていたの。そうすると、白いものがチラツ、チラツと降ってきたのよ。そして、奥の方を見ると雪がたくさん降っていて、遠くの方は真つ白だったのよ。まるで、冬と春が同時にきた様な光景だったの。そこで、目が覚めたの。私、何だか落ち着かなくて、私はどこかに行かなくてはいけない、急いで行かなくてはいけない。そんな気がして、部屋をウロウロ歩き回って、何気なく、そうだ久美子に電話してみようと思ったの」

「ああ、それで電話してきたの。里美が電話してきてくれなかったら、私、本当に流産してたかも知れないわね」と神妙な顔をした。

「うーん、そうねえ。あの時、久美子のアパートのチャイムを鳴らして、出て来た久美子の姿は普通じゃあなかったもの。何だか青白い顔をして、少し痩せた様に見えたり、何だか尋常では

ないものを感じたわ。

それに綺麗好きの久美子にしては、食器なんかの洗い物がたくさんたまってたし、久美子らしくないと思ったの。久美子、もしかして、私が夏だけの限定のリゾート地の派遣だから、もうすぐ戻って来ると思って、家事をあまりしない様にして、私を待っていたんじゃないの？」と言うと、

「うん、食べた物は全部吐いてしまうし、吐かなくても、食欲がなくて少ししか食べられないし、だんだん体力が落ちてきてね！ 内心、里美が来てくれたらなあ」とは思っていたけど」

「あ、そうなの。何だか誰かがテレパシーで、私に知らせてくれた様な気がするわね」

「うん、そうかも知れない。だとしたら不思議な現象ねえ」とお腹を撫でる久美子である。

## 結婚

その後も、しばらくの間は久美子と時々会って、子供がスクスクと育っていくのを見るのは実に楽しいことだった。私はもうそろそろ仕事を始めようと思っていたら、久美子が縁談の話しを出した。

「里美にはとても助けられたわ。だからって訳でもないけど、ネー、私、ある好青年を知っているんだけど、とにかく、いい人なんだけど、里美、会ってみる気ない？」と言ってきた。

「その人は、松下たけしと言う名前で、鳥取県の人で、梨と稲を作っている農家の人なんだけど。ホラ、里美は前から綺麗な物を見ると、すごい感動する人じゃない。だから里美の生きがいになったらしいなと思って」と言う。

「うーん、そうねー、私も二十代半ばが近いけど、いっこうに彼氏が出来そうもないし、久美子のお勧めの人なら、きつといい人なんだろうから会ってみようかな」と返事をした。

すると久美子が

「アー、良かった。それじゃ早速、相手の人に連絡するネ！ 相手は里美より7才、年上なんだけど、いいでしょ？」と言った。

「そりゃいいけど」

「その人、うちの旦那の会社の同僚のお兄さんなんだけど、とつても気のいい人なのに何故か

## 結婚

縁遠くて、未だに彼女らしき人が出来ないんだって」と言う。

久美子の旦那さんの段取りで、お見合いを近い内にすることになった。

私は元々、田舎育ちだったので農家に嫁ぐことには抵抗はなかった。

お見合いの場所は、久美子の住んでいる近くの居酒屋で行われた。

相手の人相を見たら、決していい男というわけでもないけれど、いかにも人柄の良さそうな人だと思った。

私は特に相手の目をよく見た。どんなに口が上手でも、話す内容が優れていても、目を見れば大体その人の性分が分かる。目はウソをつかない。私はこういう人だったら幸せにしてくれると思っただ。

お見合いが終って、皆さん鳥取に帰られた。

久美子が早速「ねえ里美、どうだった？」と感想を聞いてきたので

「うん、なかなか人柄の良さそうなんだと思っただよ。こんな人ならきつと大事にしてくれそうだと思っただ」と答えた。

「アツそう、それじゃあ里美は結婚してもいいと思っただわけね！」と急かす様に言った。

そして私の周りの人々が色々動き出し、次々と結婚の段取りが決まった。

私は派手な結婚式はしたくないと言うと、相手側も、そう言っているということで、簡単な結婚式と近い身内と友人も少なく、鳥取でつつがなく結婚式が行われた。

新婚旅行も無しということにした。